

## うだうだとゆつくりと

大松 達知

今年8月。俳句甲子園全国大会@松山市の引率者のひとりとなった。私は文芸部の幽霊顧問。前日の羽田空港で生徒の名前と顔を一致させて出発。結果は、勤務校2チーム合計で9勝2敗。1チームが準優勝。1チームが奨励賞。他に作品賞いくつか。すごい。

俳句甲子園って、俳句のデイベートをするやつ?と訊かれると返答に困る。実際は、事前に兼題にしたがつて提出した句への評価点を中心。審査員の持ち点10点のうち平均7点くらいが(作品点)に入る。そこにデイベートの甲乙が(鑑賞点)として1点、どちらかの句に加わる。同点の場合は作品点が高い方が勝ち。つまり、基本的には句の良さで勝負が決まる。それに、デイベートと言っても、過不足なく疑問点を指摘する解釈鑑賞の鋭さが大切。(自分のチームの句の長所を説明するのも大切。)だから生徒たちはふだんから句の鑑賞を通して良い句とは何かを言葉で言えるように訓練する。そこから句作につなげてゆく。その

循環が良いのだ。

それはともかく、歌人として見ると、俳句って展開が急だよなあと思う。勤務校の生徒の句、

・花芒風の十万億土なる

関友之介

の題は「十」。すごい展開力からの凝縮力。漢字の強さが硬質の抒情を噴出させる。しかし、これを見て私はどうもそわそわした。そして、戯れに失礼ながら、

・いちめんのああ花すすきひつたりと風ぎあてわれの十万億土

なんて歌にする。ゆつたりと始めて、うだうだと流れて行きながら要所は締めたい。それが短歌。そうか、俳句は滝で短歌は川なのかもしれない。俳句はざるそばで短歌は鴨南蛮か。それはそうと、

・秋刀魚ほぐしつっ進学の話など

関友之介

を見れば、

・しろがねの秋刀魚をほぐしながらする早稲田受けるかどうかの話

なんて、具体性を入れて引き伸ばしてみたくなった。いきなり秋刀魚!と言わないのが短歌なのだろうか。ひとつの作品の中の名詞の比重の大きさ、それも剥き出しのカチカチ名詞を読み手が急速解凍する感じ、それが俳句の瞬発力の良さなんだな、それでは短歌の良さはなんだろうか? それを考えながらの3日間だった。